

中華全国婦女連合会との定期交流10年 平和・女性の人権でさらなる共同へ

新日本婦人の会訪中代表团

新日本婦人の会訪中代表团(団長・米山淳子事務局長、団員・平野恵美子国際部長、安達絹恵中央常任委員)は、4月15〜18日、中華全国婦女連合会(以下、婦女連)の招きで、北京を訪れました。以下、訪中代表団のレポートを紹介します。

女性差別撤廃へ相互理解と とりくみをつよめる決意を

婦女連との定期交流を始めて10年、今年4月に創立60周年を迎えた婦女連との活動交流をはじめ、女性再就職プロジェクトや農村女性開発プロジェクトなどの地域活動、幼稚園の親子教育活動の視察を通じて具体的な経験にふれ、相互理解と親交を深めあいました。

様変わりした北京

新緑の鮮やかな季節、空港から市内へと続くポプラ並木では、真つ青な空のもとに雪のように柳絮(りゅうじよ)が舞い、幻想的な光景でした。昨年オリピックを終えた北京は、道路

や地下鉄など交通網が整備されていましたが、走行する車両の多さにびっくり。かつてのようにな自転車が何列も並んで走っている姿はほとんどありません。

巨大スクリーンをはじめこんだ高層ビルやスポーツ用品のブランドなどの大看板が目にとびこみ、海外ブランド店をはじめ、マクドナルド、ケンタッキ、吉野家などのファーストフードのお店もあちこちに見られました。石油価格高騰や金融危機の影響で外国人観光客は減っているようですが、「内需拡大」政策で国内観光が奨励されており、オリピックのメインスタジアム「鳥の巣」や故宮など観

光スポットには、全国各地から来た団体観光客でにぎわっていました。



繁華街は大看板、広告が目立つ

有意義な会談に

会談は、じっくりと話し合えるようにと婦女連本部3階の国際部会議室が準備され、婦女連からは鄒曉巧国際部長、張広雲国際部アジア処調査研究員、楊暘アジア処副所長が出席。金融危機のもとで悪化した雇用問題や格差拡大の実態、女性と子どもの日常生活、女性のエンパワメントをめざす活動の紹介や意見交換をしました。鄒国際部長は国連女性差別撤廃委員会(CEDAW)の委員で、今年

7月の日本政府報告審査を担当することもわかり、出発前夜に完成したばかりの新婦人のレポート（女性差別撤廃条約実施状況に関する第6回日本政府報告に対する新日本婦人の会のレポート」本誌5月号掲載）を手渡し、直接日本の女性の実態やNGOの活動内容を伝えることができたことも意義深いことでした。

◆ ◆ ◆

中国の女性の地位向上・男女平等めざすと知りくみは、1995年の北京会議以降、女性權益保障法にもとづく「計画」とCEDAWの実施を位置づけ、この間、女性權益保障法、婚姻法、就職促進法など法律の制定や改正をすすめてきました。婦女連も学習会やシンポジウム、専門家の助言などを得て積極的に提言をおこなったり、06年のCEDAW審査の勧告で強調された、女性の政治参加とDV防止の国レベルでの法制定に向けて、政府に要請しているとのこと

す。中国自身、男女平等をはかるジェンダーエンパワーメント指数（GEM）でも世界72位と遅れており、婦女連が政府の女性政策の不十分な点や、提言どおりに進まない実情などをつかみ、発信する役割をしていることもよくわかりました。

現在、昨年の全国大会で打ち出した①政府や国際基金の支援を得た農村や貧困層に対しての小口融資の規模拡大 ②教育訓練を通じて女性の資質・能力向上 ③婦人病検査・健診の拡充 ④女



左から：鄒国際部長、米山事務局長、婦女連洪別
主席、平野国際部長、安達中央常任委員

性の意思決定参加の推進の4つの重点にとりこんでいます。特に、遅れている分野である農村女性の健康、保健・医療、政治参加について、一気に引き上げていくため力を集中していること、また7万6000人の専従者、100万人のボランティアを擁する婦女連が、幹部・専従者向けに具体的な目標を設定し、CEDAWも位置づけた幹部教育プログラムを作成し、教育・訓練を推進しているとりくみは印象的でした。

中国でも解雇や貧富の格差などの問題がありますが、日本と決定的に違う点は、「自己責任」として放置するのではなく、国として手立てをとっていることです。政府が企業に解雇禁止令や倒産への補助金をだすなど雇用や再就職の対策をはじめ、直近でも人権保護の措置と目標を定めた初の「国家人権行動計画」、公的医療保険の加入率を引き上げる医療制度改革などの



中華婦女連事務所前にて

政策を次つぎと打ち出しています。女子学生の就職難解消のための企業への働きかけや、再就職を希望する女性たちのニーズにあわせたプロジェクトなど、政府とコミュニティのかけ橋となる婦女連の活動とあわせて、中国政府の社会全体の底上げに真剣にとりくむ姿勢と政治的意思を強く感じました。同時に、女性差別を撤廃していくという同じ目標に向かって相互のとりくみをつよめていく決意を固めあえたことも、大きな収穫でした。

地震の教訓いかして

歓迎夕食会では、洪天慧副主席も同席し、昨年の四川大地震

の際に、新婦人から募金と見舞いの手紙が寄せられたことへの感謝とともに、婦女連の被災者救援活動などについて話されました。

婦女連は、被災地の女性たちに生理用品や粉ミルク、下着など女性ならではの支援物資を届けるとともに、専門家と一緒に現地に訪問し、親を亡くした子どもや子どもを失った親などから話を聞くなどの被災者の心のケア、6月1日の国際子どもデーに四川の子どもたちを北京に招待し、励ますとりくみなどを行ってきたとのこと。また四川大地震では、学校が崩壊してたくさんの子どもたちが犠牲になったことから、「学校を世界一安全で、親にとって一番安心なところ」とのスローガンをかかげて、耐震設備の強化などにもとりくんでいるそうです。この間新婦人の各地の地震災害への救援活動とも通じるものがあり、思いをひとつに重ねることができました。(米山 淳子)

中華婦女連の女性の自立支援活動

女性の再就職

プロジェクト参観

16日午後、婦女連の「女性再就職プロジェクト」活動を学ぶために、北京市宣武区にある北京満堂香国際茶城(200店舗を有するお茶専門店街)を訪問しました。



「熱烈歓迎」の大きな電光掲示板に
迎えられた満堂香にて

宣武区婦女連主席の季春栄さん、満堂香国際茶城社長の嚴梅さんをはじめ、若いスタッフ大勢に迎えられ、ビル玄関には「熱烈歓迎新日本婦人の会代表団来訪」との赤い電光掲示板、懇談した応接室にも赤い布の「歓迎」の横断幕が飾られていました。

〈婦女連は

自立・支援のかけ橋〉

北京市の主要4区の一つ宣武区の婦女連は、「女性の経済的地位の保障なしに、社会的地位も家庭内の地位の向上もない」と、女性の権利を守る重要な活動として、女性の再就職支援を位置づけています。支援は教育・訓練に始まりまず、①婦女連の掲げる自尊

・自信・自立・自強の精

神、②権利についての知識、③関連する政策、④職業訓練を中心とする学習を通じて、女性が自信をもって自立できるように意欲を高め、力をつけることをめざします。解雇の情報は地域の行政に記録されるので、解雇された女性にも講座のお知らせが届きます。区内の失業率は2%未満、失業者の34%が女性で1万2000人中約4000人、毎年約1000人が婦女連の職業訓練を受けています。

宣武区婦女連は、行政や専門家と協力して就職相談会を開いたり、職を探している女性との面談を設定したりしています。区内の労働組合や他団体と連携し、情報発信のネットワークもつくっています。また障害をもつ女性や高齢女性のエンパワーメントをめざし、ストックキングを使った花やオリピックのマスコット、工芸品づくりの技術や製品の販売を支援しています。

満堂香国際茶城には北京で有



四季青鎮「双学双比基地」の桃園
で説明を聞く

数の茶専門店が集まっています。働いている人の80%は女性です。社長の嚴梅さんは40歳、20年前に露天商から始めてお茶の販売一筋に頑張ってきた女性。嚴梅さんは「商品の開発、生産・販売・普及活動など、お茶関連の仕事の大半を女性が担っており、女性が力を発揮できる分野。お茶文化をひろめながら、女性が自信をもって働きくらししていけるように工夫している」といいます。

婦女連は働く女性の学習や情報交流の場として女性委員会をつくるよう企業に要請し、宣武

区には70できています。満堂香は200店舗で一つの女性委員会を運営しており、委員長は嚴梅さんです。満堂香の女性委員会は、市や区の婦女連と協力して、学習・研修やシンポジウム、スピーチ大会、遠足やハイキングなどさまざまな活動をおこなっています。婦女連はネットワークを生かして従業員の声聞き、意見や要求を政府や行政に届け、反映させる役割も果たし、女子大生の就職難の問題でも各企業に協力を要請。満堂香は女子大生の実習の受け入れや就職先として門戸を開くなど、積極的に協力しています。このように婦女連が行政・企業と女性のかけ橋となって先進的な例をつくりながら、各地により経験をひろげています。満堂香国際茶城のビル内は、「青・白・黒・赤・茶・黄」の6色に色分けされる代表的な中国茶のブースや、茶道具の展示・販売、中国琴の講習やセミナーなど、中国のお茶と伝統文化

夫婦共働きが大半の中国ですが、日本のような0歳児から預けられる保育所はほとんどなく、3歳からの幼稚園入園までは祖父母や保育ママ（住み込みも）などの協力で子育てをしています。中国の幼稚園は両親の勤務形態にあわせて午前8時から午後5時まで、3回の食事と2回のおやつが出ます。5時以降の延長保育や幼児教室もあり、月曜日から金曜日までまるまる預かる園も。

中国幼稚園事情

北京市内にある中華女子学院付属幼稚園では、地域に住む入園前の2歳前後の子どもたちを対象に毎週土曜日の午前中に親子学級を実施しています。6カ月のコースで16回、2コース参加して入園する子もいます。月謝は、1コース6カ月、16回で11200元。月齢の小さい子どもと大きい子ども14人ずつのクラス、計4クラスですが、希望者が多く倍率が高いそうです。1回の教室は9時から10時半までと10時半から12時までの2部構成で、室内で2クラス、園庭で2クラスが活動し、入れ替わるというやり方です。入室できる保護者は一人。大半は母親ですが、祖母がつ



いている場合も。また、教室の外では送迎の父親や祖父母の姿が見られました。各クラスに先生が2人つき、室内では毎回テーマを決めて学習のほかにリズム体操や絵本の読み聞かせなどをした後、担任と保護者の交流の時間があります。子育ての相談や家庭での子ども様子など出し合おうほか、保護者同士が知り合う機会になります。親たちは1週間の子どもの様子を用品紙に記入し園に出しますが、子どもの生活や発達の記録になると同時に、親の観察能力や子育ての力をつける助けにもなっています。園庭では父親や祖父母もいっしょに体操やゲーム、自由遊びを楽しみます。

の博物館のようでした。

農村女性開発

プロジェクト参観

17日には、北京の西北、「農村女性プロジェクト」にとりくむ海淀区婦女連との交流のために、香山御光農園と四季青鎮*双学双比活動基地を訪ねました。ここでも歓迎の大きな横断幕。懇談会場には、日本の「とちおとめ」を改良した摘みたてのイチゴと桑の実が並べられています。

海淀区四季青鎮（人口8万5000人）の農家女性は2万5000人、もともとの農村地帯が都市化して産業構造が変化するなか、女性の雇用問題が課題になりました。この地域には、婦女連と行政の協力で「双学双比基地」と言われる12の拠点農園をつくり、女性の再就職や起業を推進しています。12の「基地」の責任者はすべて女性で、600人の女性スタッフが働いています。双学双比とは知識や

文化を学び、社会への貢献を競いあうという意味です。

就職促進のために婦女連は、①女性のニーズに合わせた教育・訓練（農業技術、編み物、花作り、ホームヘルパーなど）や採用情報の提供、②法律や政策などの知識の普及、③経営・管理の理論や起業のノウハウの提供などの支援事業にとりくんでおり、訓練を受けた女性の80%が再就職をしています。これらの事業に政府から毎年50万円が農業発展基金として支給されています。

観光農園では60棟あるイチゴのハウスの大半を女性が管理しています。みな再就職で農業に従事し始めた人たち。収入も増えているそうです。

訪問した2カ所とも公営で、イチゴ・さくらんぼ・桃・桑などの花や果物の栽培や緑化技術にとりくんでおり、スタッフの80%は女性。観光農園でも「双学双比基地」でも、都市部と農村部が共存する地域の特性を生

かして、専門家の女性と農村女性の協力で学習や料理などの実用講座、女子大生を含めた女性の就職の機会拡大に貢献しています。ここでも、婦女連が「かけ橋」の役割。支援によって力

をつけた女性がリーダーとなつてエンパワーメントを支援する、中国の女性たちのとりくみに多く学ぶことができました。*鎮は、中国の行政単位で「町」に近い。（安達 絹恵）

交流再開から10年、 友好と共同のあらたな発展へ

1999年に新婦人代表団が中国を訪問し、中華婦女連との交流を正式に再開してから、10年。今回で定期交流は7回（新婦人の訪中4回、婦女連の訪日3回）のほか、北京+5記念シンポジウム（2000年・北京）、日中国交正常化30年記念行事（2002年・北京）、日中平和友好条約締結20年記念行事（2003年・東京）、北京+10記念集会（2005年・北京）、新婦人のアジア3カ国歴訪（2005年・北京）、東アジア女性フォーラム（2007年・北京）などさまざまな機会での交流を重ねてきました。この10年に新婦人と中華婦女連が親交をあたためてきただけでなく、互いの組織の性格や特徴、活動スタイルについての理解と信頼を深めてきたことを、強く実感しています。



新婦人から資料・写真で説明を



香山御香園にて交流

ちがいと共通点を 理解しあつた10年

会談の冒頭、目の前に資料を山積みにした鄒国際部長から「1999年に婦女連と新婦人の交流が再会し、この10年で友情が深まっている。中日関係において新婦人のことを重視しているが、それは新婦人が小泉元首相の靖国参拝問題含め平和の課題で活動していて、さまざまな問題について高い見地と長期的視野で見ているからであり、

庶民のくらしの問題にとりくみ、共通の問題で学びあっているのがすばらしい」と言われたことは、新婦人がどういう会であるのかを理解し評価していることを強く感じました。政府との強いパイプを持ち法律の制定や改正にも具体的な提案をし、それが生かされる立場にある婦女連ですが、鄒国際部長が政府の女性政策の不十分な点や、提言どおりに進まない実情を含め、率直に語られたことも印象的でした。

交流再開当初は、同じ女性団体といつても国の体制や活動スタイルが異なり、率直に言つてとまどうこともありましたが、婦女連にとつても、私たちが何より両組織間の時間をかけての会談を重視し、日本での見学は広島島の原爆資料館、神奈川、沖縄、北海道などの米軍や自衛隊の基地であり、また新婦人の親子リズム小組や産直センターであったりと、日本の他の女性団体との交流とはかなり勝手がちがっ

ていたのではないかと思えます。10年の交流を経て、核兵器廃絶と憲法9条をかかげ、女性の人権やくらしの問題で草の根で活動する女性団体として新婦人を理解し評価しているのだと実感します。

新婦人の婦女連に関する理解についても同じです。婦女連は個人加盟ではなく団体の連合体です。日本の約25倍の国土に多様な民族からなる約10倍の人口を抱える中国で、政府の女性政策の推進を担い、同じNGOといつても専従者ふくめ組織の規模や財政などあらゆる面で新婦人とは大きく異なります。国際部だけでも地域別に数十人のスタッフがいて、各国の女性団体はもちろん政府代表や国会議員とも交流、女性問題での国際会議を主宰したり、アジアやアフリカなどの女性分野のとりくみの経験が少ない国々を対象に、女性省や関連省庁の大臣のためのセミナーを開催したりしています。ダイナミックで華や

かなイメージが先行していましたが、中央、県や市、そして地域や職場レベルでの加盟組織が大きな方針で団結しながら、それぞれの実情や女性の要求にあわせてとりくみをすすめているという、新婦人との共通する部分、具体的な現場を見る中でよくわかってきました。

政府を支えながら女性の人権・地位向上にとりくむ婦女連と、平和からくらしまであらゆる課題にとりくみながら、女性分野では特に条約の実行に消極的な政府の姿勢をかえるために力を注がなければならない新婦人と、立場もスタイルも大きく異なりますが、女性が今直面している問題をどう解決するか、組織のネットワークを生かしながら女性の実態と要求をつかんで行動する点は同じです。

女性の都市や農村部での再就職支援のとりくみの視察をするなか、「現場の女性のニーズ」という表現がどこでも繰り返していられたことに、婦女連の活

動への姿勢の基本があらわれていると思いました。こうした私たちの理解も、10年の交流の積み重ねがあつてのものです。

新しいリーダー 育つ婦女連

昨年秋の5年に1度の全国大会で、主席や副主席はじめ婦女連の多くの役員が代わり、国際部スタッフにも変化がありました。私たちが滞在中、アジア・アフリカの女性分野を担当する閣僚向けセミナーと、国連国連国際災害抑制戦略（ISDR）と婦女連の共催による「ジェンダーと災害危機抑制に関する会議」を目前にひかえて、国際部は大忙しでした。セミナーの準備・運営は西アジア・アフリカ処が担当しており、処長は、日本語が堪能で新婦人との交流の窓口として親しくおつきあいをしてきた盧亜民さんでした。昨年の大会でアジア処処長から西アジア・アフリカ処の処長に異



全国婦女連国際部長(中央)とアジア処のメンバー

動したそうです。夜中まで海外ゲストの出迎えなど目が回るほど忙しいなか、私たちをホテルの部屋に訪ねてくれ再会を喜び合いました。同じく、日本語のできるアジア処の張広雲さん、楊陽さんも、それぞれ責任が重くなり国際部を支える中堅幹部になっていきます。国際部長も日本語を自国語のように話す張静さんから、鄒曉巧さんに。張静さんは、婦女連の弁公室(事務局)責任者という、組織実務の要のポストについています。

平和の新婦人への信頼

1回めの訪日団の団長だった顧秀蓮さんはその後主席になり、中国の国会にあたる全人代の副議長にもなりましたが、会うたびに親子リズムを体験したときの楽しかった思い出を語ります。侵略戦争を美化し憲法をかえて日本を戦前のような軍国主義の国にしようとする動きが強まり、アジア諸国に懸念が広がっていた2005年、日本国内にはそうした動きに反対する草の根の運動があり、女性たちががんばっていることをアジアの姉妹たちに伝えようと、高田公子会長を団長に韓国、フィリピン、中国を訪れました。たった1日、婦女連との懇談のみの滞在でしたが、顧主席(当時)は、「この時期にじかに活動を伝えるに来てくれてうれしい、平和のために協力したい」との感謝とともに、1回めの訪日での横須賀基地や親子リズム小組が強

く印象に残っていると語りました。この懇談は、「平和の新婦人」を深く焼き付けるものになったのだと思います。



今年創立60年を迎えた婦女連。交流再開10年、女性差別撤廃条約採択30年・日本審査の年という、さまざまな意味で節目の年に婦女連との意見交換をもつことができ、とても有意義な訪中になりました。鄒国際部長から、今後の交流の発展へ、代表団の派遣や機関紙の交換のほか、国際会議でも協力・交流したい、来年は北京会議から15年で今年秋にはアジア太平洋の北京+15の会議がフィリピンであるので、その機会にも意見交換をと、期待が述べられました。アジアの姉妹として、これからそれぞれの違いと学び、共通点を確認しあいながら、平和で公正なアジアと世界の実現へ、手を取り合っていきたいと思えます。

(平野 恵美子)

新婦人・中華婦女連交流経過

1999年	7月5—10日	新婦人訪中 井上美代会長 高橋和枝事務局長 村岡晶子中央常任委員、平野恵美子国際部長 徳永淳子	北京 婦女連との会談（馮淬書記処書記） 顧秀蓮副主席・第1書記との会見 中国共産党対外連絡部副部長と会見 東城区地域サービスセンター 中華女子学院 中国人民抗日戦争記念館、万里の長城、故宮 大連 大連市婦女連との懇談 6・1幼稚園、家事服務公司
	12月8—14日	婦女連訪日 顧秀蓮副主席・第1書記 張静国際連絡部部長、朱萍婦女連弁公庁処長 盧亜民アジア処副処長、楊陽アジア処職員	東京 新婦人との会談 国会見学、都本部大会 日本共産党本部訪問 神奈川・米軍横須賀基地、「平和の母子像」 埼玉・親子リズム 大阪・職場班 広島・原爆資料館、平和公園 京都見学
2000年	9月11—16日	北京+5記念シンポジウム 高田公子副会長 小関啓子、柳下靖子	北京
2001年	2月20—24日	新婦人訪中 高橋和枝事務局長 平野恵美子国際部長、徳永淳子	北京 婦女連との会談（鄒曉巧国際部副部長） 上海 上海市婦女連との懇談 市内史跡、服装有限公司
2002年	3月12—19日	婦女連訪日 李秋芳婦女連書記処書記、女性研究所処長 盧小飛中国婦人報総編集長 郭崎中央国家機関女性工作員会処長 張広雲国際部副部長、蔡琳国際部職員	東京 新婦人との会談 日本共産党本部訪問 職場班、親子リズム、国会、婦団連 千葉・多古町産直センター 沖縄・米軍基地、南部戦跡
	9月6—11日	日中国交正常化30周年記念行事 井上美代会長 吉田きよ子中央常任委員 西川香子新婦人しんぶん編集部員	北京
2003年	2月22日	日中平和友好条約締結25周年記念行事 彭珮雲婦女連主席を団長とする代表団	東京
2004年	4月26—30日	新婦人訪中 高田公子会長 鍛冶みち機関紙部長、上仲子都本部会長 平野恵美子国際部長、徳永淳子	北京 婦女連との会談（趙少華副主席、張静国際部長） 中国婦女報社、打工妹之家 山西省 山西省婦女連との懇談 大寨、太原婦女兒童発展センター、平遥城、 常家庄園
2005年	7月11—12日	アジア3カ国歴訪・婦女連訪問 高田公子会長 神出泉中央常任委員、平野恵美子国際部長	北京 顧秀蓮主席と会談
	8月29—31日	北京+10記念集会 高田公子会長、紫垣ちひろ	北京
2006年	6月12—17日	婦女連訪日 張世平婦女連書記処書記 盧亜民アジア処処長 韓桂華北京市婦女連研究室副主任 畢東麗中国女性兒童博物館展示部責任者 周蓉輝婦女連兒童部科長	東京 新婦人との会談 科学技術館、科学博物館、こどもの城 北海道 リズム小組、産直ランチ、道本部交流 真駒内自衛隊基地、小樽
2007年	7月17—19日	第6回東アジア女性フォーラム 平野恵美子国際部長	北京
2009年	4月15—18日	新婦人訪中 米山淳子事務局長、平野恵美子国際部長 安達絹恵中央常任委員	北京 婦女連との会談（鄒曉巧国際部長） 再就職プロジェクト、入園前親子教室